

## ルイーズ・ラベ：狂気へのオマージュ

饗庭千代子

## 1

ルイーズ・ラベ(1520頃-1566)の散文作品『狂気の神と愛の神の論争』(*Le débat de Folie et d'Amour*)は、『リヨンの人、ルイーズ・ラベの作品集』(*Euvres de Louise Labé lionnoise*)に収められて、リヨンの出版人ジャン・ドゥ・トゥルヌの手で1555年に上梓された。作品集にはラベの全著作が、まず〈A M. C. D. B. L.〉と題された献辞、次に〈*Le débat de Folie et d'Amour*〉、最後に〈*Elégies et Sonnets*〉の順番で収録されている。作品集の出版、その構成には作者の意思が強く働いたと言われており、『狂気の神と愛の神の論争』(以下『論争』と略す)を詩作品よりも先に読んでほしいという作者の意図ははっきりしている。ルイーズ・ラベに盛名をもたらすことになるのは3篇のエレジーと24篇のソネで、献辞や散文作品は一般にはあまり知られていない。詩作品は作者自身の奔放な恋愛をうたった、いわば恋愛日記で、それによって彼女は「恋をし詩を書く女」ともてはやされ、その大胆で過激なエロチスムのために娼婦のそしりを受けることにもなるのである。したがって『論争』は、当時としてはあまりにも露骨な官能的表現が誤解されることを予測しての自己弁護なのだ、と少々うがった見方をする論者もいる。そのことも含めて、何よりも詩作品を表層的に読まれることを危惧し、恋をする自分と、それを冷徹な目で見据えるもう一人の自分の存在を明らかにしておきたかったのだと考えるべきであろう。

この作品は、擬人化された二者すなわち、フォリー（Folie—狂気、痴愚の女神）とアムール（Amour—愛の神）の争いがオリンポス山の法廷に持ちこまれ、それぞれの代弁者であるメルクリウスとアポロンによって引き継がれた論争にユピテルが和解判決を下すという筋書きを持っている。物語は、あらずじと第一話から第五話までの対話で構成され、最後に、タイトル中の〈Folie〉と〈Amour〉を入れ替えた語順の結語〈Fin du débat d'Amour et de Folie〉が置かれている。二者の論争は愛をテーマに繰り広げられるのであるが、作者の洞察は広く人間社会のさまざまな領域に及び、恋愛論としてだけでなく、女性論、社会論、文化論など多様な読み方を可能にしている。本稿では、この二者の弁論とユピテルの裁定、そして結語に組み込まれたルイズ・ラベの思考の過程を、恋愛とフェミニズムの視点からたどり、物語作成の思想的意味を考察してみたい。

## 2

『論争』はルイズ・ラベの創作であるが、彼女が当時の文化人との交わりや書物によって、あるいは実際に見聞して得た膨大な知識や情報が、ある種のパロディ的な要素となってモザイクのように随所にはめ込まれている。本章では、彼女が援用、借用したいくつかの題材について考証し、作品解釈の一助としたい。

この作品には六神が登場するが、フォリー以外は神話の系譜に連なる由緒正しい神ばかりである。作者はまず主人公の一人に出自の不確かな新参者の女の神を据えたのである。この女神はもちろん、十六世紀初めに出版されたエラスムスの『痴愚神礼讃』に由来する。痴愚神は、豊饒富裕の神プロイトスと青春の女神ユウエンタスの娘だとして、エラスムスが創造した寓意の人物で、作者はこの女神に自画自讃させることで社会のあらゆる層の人間の狂気、愚行を痛烈に風刺している。フーコーが、「西洋の想像力のなかで、十五世紀中ごろ突

如として狂気の主題が文学と画像のなかで急激に表明される」と述べているように、フォリーはルネサンス時代の申し子なのだ。エラスムスの作品では、痴愚神が自分の功績を一方的に例証していくモノログ形式がとられているのだが、ラベはフォリーの対立原理を具現するアムールを据え、さらにこの二者の代弁者にメルクリウスとアポロンを登場させてディアログ形式で物語を構成している。自讃を他讃に置き換え、複数の人物を設定し、さらにユピテルという中立の裁定者を加えることで、『論争』にデモクラティックで調和のとれた枠組みを整えたのである。

対話形式は特にルネサンス以降好んで用いられたが、ラベはそれを法廷での弁論に仕立てている。D. オコンナーによれば、その展開は十六世紀初頭の実際の裁判様式にほばかっているという。正確な法律的知識は親しい友人の一人であったイタリア人弁護士から得たと推察されるが、作者は、文化面では女性の活躍がめざましかったルネサンス時代にもっとも堅固な男性社会であった司法の場を、作品の舞台に選んだわけである。

もう一人の主人公であるアムールは、クビド、クビドン、キュービッド、エロスなどの呼称で広く一般に親しまれており、フォリーとは対照的に、神話界のサラブレッドである。この神の誕生についてはプラトンの『饗宴』に詳しいが、諸説が伝えられる中で、今日までのところ軍神マルスと美と愛の女神ウェヌス（アフロディーテ）の息子説が最有力である。しかし『論争』では、フォリーは青春の娘、アムールはウェヌスの息子と、いずれも母親だけが明確に記されている。作者がこの『論争』にフェミニズムをからませていることと考え合わせて、ここに「男を生むのは男である」というアリストテレスの言葉に象徴される父権制イデオロギーへの異議申し立てをしのばせていると推測することは突飛すぎるだろうか。この愛の神キュービッドについては、翼をはやし、目隠しをつけ、弓矢を手にした子どもというイメージが一般的である。ルイズ・ラベの物語ではアムールは最初目の見える五体健全な姿で登場し、フォリーと口論の挙句、目をえぐりとられ、包帯で目隠しをされることになる。古

典、古代には盲目のキューピッドは存在しなかったようだが、ボッティチェリの《春》に見られるように、ルネサンス期には目隠しをした状態で描かれていることが多い。しかし画像で見る限り、目の見えるキューピッド像はその後も描かれているし、二種類のキューピッドが同一画面に登場していたり、『目隠しを取るキューピッド』もあって、愛の相反する二面性、その優劣が古来主要なテーマであり、時代の精神とともにさまざまに取り沙汰されてきたことがうかがえる。こうした二種類の愛の神の存在とキューピッド像の変貌が作品構想のヒントになったことは十分考えられるのである。

『饗宴』においてプラトンは、エロスを美しく善き神として無条件に讃美する五人と、神と人、美醜、善悪の中間者だととらえるソクラテスを対峙させているが、五人のエロス讃美に論旨の矛盾をひそませて、ソクラテスの説をより説得力のあるものにしている。さらに、女性の賢者ディオティマを設定してソクラテスに愛の奥義を悟らせる役割を担わせている。こうしたプラトンの図式や手法は『論争』に生かされて、作者の主張の正統性を裏づけることになる。

以上のほかにも、知性と文化を象徴するアポロンと商売の守護神で名だたる雄弁家のメルクリウスへの絶妙の配役、アムールとウェヌスの近親相姦の母子関係の想起など、作品の登場人物や状況設定から論戦で飛びかう言葉や表現にまで、学識や経験に基づいた寓意、風刺、逆説など深長な意味を無駄なく、効果的に含ませているのである。

### 3

フォリーとアムールのいさかいの発端は神の館に入る順番争いである。この二神が深く関わっている愛の領域でどちらが強いのか、重要なのか、優位に立つのかを明確にするために、公の場で、第三者の立会いのもと、それぞれの代弁者のあいだで論戦が繰り広げられる。

すでに述べたように、ルイーズ・ラベはエレジーとソネの中で自身の数多く

の恋愛体験を官能的な詩句であますところなく語っている。そこに共通しているのは、«Depuis qu'Amour cruel empoisonna / Premièrement de son feu ma poitrine» (texte, Sonnets IV) «Ainsi Amour inconstamment me mène (mène)» (ibid., Sonnets VIII), «Où sont d'Amour les fleches (flèches) dangereuses» (ibid., Sonnets XI) といった詩句に代表されるように、恋を愛神という他者の仕業としている点である。恋や愛を娯楽や神などの為せる業とする考え方は西欧の恋愛観の根底をなしているのだが、ルイズ・ラベが異常に思えるほどそのことを強調しているのは、彼女が、父親の方針もあって女子としては破格の教育を受け、学問、武芸に秀でた、とりわけ主知的な女性であったことと関係している。次の引用詩句に見るように、自分が理性を失うような恋に陥るなどということはまさに晴天の霹靂であったのだ。

.....il (Amour) me prit,

Lorsqu'exerçois (exerçais) mon corps et mon esprit

En mille (mille) et mille (mille) euvres (œuvres) ingénieuses,

(texte, Elégies III)

En me moquant, et voyant l'un aimer (aimer),

L'autre bruler et d'Amour consommer : (ibid., Elégies I)

〈savoir〉によって得られる喜びを、持続する至上のものとして称賛し、〈sens〉の与える快楽をはかない愚かなものと軽蔑していた自身が、なにゆえ恋に身を焦がす日々を過ごすはめになったのか。彼女は恋を経験して、自身の内に時として理性をも拉ぐ力、つまり非理性、狂気存在に気づくのである。《論争》におけるアムールとフォリーの対立や権力争いは、作者の内面のこうした自己矛盾とそれによって引き起こされた葛藤にほかならない。ユピテルの館の入口でフォリーに自尊心を傷つけられたアムールは暴力に訴え、切り札の矢をフォリーに向けて放つ。しかしこの矢はたくみにかわされ、目には目をとばかりにアムールは盲目にされてしまう。万人に、神々にさえ威力を発揮するとアムールが自負していた矢が唯一フォリーにだけは通用しなかった、とい

う時点でもう勝負は明らかで、フォリーに軍配が上がるのが予想されるのだが、ラベはこの二神と弁護人に次のような愛についての見解を語らせる。それによってそれぞれが体現する原理が明確に示され、単なる勝敗ではない、含蓄のある結末が導き出されるのである。

#### アムール

- ・自分のではなく愛する人の利益を求める完全な愛を生む。
- ・腰の淫欲、熱情は愛とは無関係。
- ・愛はその相互性ゆえに、人間の肉体と気質を美と善に向けて改造する。
- ・身分、階級などすべての秩序を保ち、人間の繁殖と世界の永続をはかるのはアムール。
- ・結婚によって人間は原初の両性具有種よりも完全になる。その幸福を支えているのが愛。
- ・愛によって人間は自己を認識する。
- ・アムールは文化の創造主。衣装、化粧、音楽、詩は愛に由来する。
- ・フォリーは愛を欲望に変え、狂気じみた恋愛、不倫、近親相姦を引きおこす。
- ・フォリーは無知、怠惰で、すべての秩序を乱す。
- ・フォリーはもっとも危険な同伴者。

#### フォリー

- ・美しき愛の誕生ほど思慮分別を欠いたものはない。つまらぬきっかけで恋に落ちたり、一目ぼれで身も心も虜になる。
- ・結婚につきものの不満や失望をフォリーが見えなくしているから結婚が成立し、世界が存続する。
- ・アムールは恋する対象と自己の一体化を求める、この世でもっとも気違いじみた欲望。一体化すればアムールは消滅。一体化などありえないのだから、アムールの存続にはフォリーの介在は不可欠。
- ・愛のために多くの人が、自分自身が変わらなくなる。
- ・人間で最も軽率な者が王になった。
- ・これまでもアムールの矢を運んでいたのはフォリーで、アムールの目は実際は見えていなかった。アムールに目は不要。これまでどおり仲よくやろう。



アムールに目を返し、アムールに ・名前で判断せず、ものごとの真実と  
近づかないよう判決を下すべきだ。 尊さをみて裁決を下してほしい。

アムールの正当性と優位を説き、フォリーの処罰を要求するアポロンは、『饗宴』でアガトンが論じる愛他主義、善と美に通じる愛をひろく人類愛にまで発展させる。また〈sentiment〉（感情）と〈sensualité〉（官能）を切離し、ルネサンス時代の快楽主義の傾向に警鐘を鳴らす。

これをうけてメルクリウスは、恋愛から人類一般に認められる狂気（=痴愚）へと弁舌巧みに論を進め、アポロンの論理を一つずつ切り崩していく。メルクリウスの戦術の巧みさは、相手の論述にまっこうから異議を唱えることはせず、むしろそれを容認した上で自身の道理に置き換えてしまうところにある。彼は、これまでのアムールの偉業はすべてフォリーの陰の采配によって成しえたことである、したがってアポロンのアムール讃美はフォリー讃美にほかならない、という三段論法を用いる。真実を述べることで有名なアポロンの起用はこの論法の成立を揺るぎないものにする点で有効だ。

メルクリウスのこうした姿勢は、単に戦術であるだけでなく、フォリー側の論理の内包する多義性をはっきり投影したものである。表に見るように、アムールとフォリーは精神の愛と肉体の愛、あるいは天上の愛と地上の愛などと表現されてきた愛の二元性をそれぞれの特性として担っているのだが、アポロンがこの二つをはっきり切り離して、もう一方の価値をいっさい認めずにひたすら排除しようと腐心するのに対し、メルクリウスは二つの原理が分離不可能であることを論証し、排除ではなく共生を提案しているのである。

双方の言い分を聞いたユピテルは最終判決を189世紀の後まで、つまり実質上無期延期とし、それまでフォリーは盲目のアムールの道案内をし、常に共にあることという中間判決を下す。メルクリウスの「仲よくやろう」説が採用されたわけで、事実上フォリーが勝利したことになる。

こうしてルイーズ・ラベの抱える自己矛盾は、対立原理が拮抗する関係から

解き放たれて解消する。フーコーの言う「狂気は理性と相関的な形式になる」ことが究極の真実として理解されたのである。ルネサンス時代には一般的になっていた盲目のキューピッド像は、ほとんどの場合否定されるべきものとして持ち出されていた。ラベはこの作品で、アムールの目がもともと見えていなかったことを暴き、これまで陰の存在に甘んじていたフォリーを表舞台に引き出して、盲目の愛の神に肯定的イメージを与えたのである。

## 4

«...et toy (toi) femme inconnue, oses tu te faire plus grande que moy (moi)?» (texte p.26) 『論争』の第一話でアムールは、自分を押し退けて先に館に入ろうとしたフォリーに向かってこのような暴言を吐く。前述したように、この『論争』では愛の二元性の対立とその統合が作者の自己確認の過程として語られるのだが、そこにはまた、恋愛における男女の行動のパターンや認識の相違をアムールとフォリーに振り分ける、という意図が重ねられている。本章ではこの作品を、男性と女性という人間の二元性に観点を移して読み解いてみたい。引用文の「無名の、女」という二語には、階級と性の二重の差別が込められており、ラベの守備範囲はさらに広く人間社会一般にまで及んでいることがわかるのだが、その点については次の機会に考察を試みたいと思う。

作品集の冒頭に収められている献辞 (A M. C. D. B. L.) はルイーズ・ラベのフェミニズム宣言とも言えるもので、その中で彼女は「糸巻き棒や紡錘からほんの少し目を上げて... 男性のように学問や芸術に励もう、低い地位、家庭という狭い世界に甘んじていなくてもよい時代になったのだ」とさかんに女性の意識の高揚を呼びかけている。この献辞がリヨンの大貴族の娘であったクレマン・ス・ド・ブルジユ嬢 (タイトルを A Mademoiselle Clémence de Bourges Lionnoise と解説することについては大方の研究者の一致するところである) に、新興の一商人の娘であり、妻である作者から贈られていることは、フラン



スのルネサンスがリヨン発信、市民発信であったように、フェミニズムもまたそうであったことを物語っている。献辞で示されているラベの女性論は、男性の特質、男性性、男性役割の優位性を認め、したがって女性の解放、地位向上を実現させるためには男性をモデルに女性を変えなければならないと主張するものである。前章で触れたように、当時最先端の教育を受けて、数か国語に通じ、哲学を繙き、さらに槍を構え、馬を駆り、と男と対等、あるいはそれ以上の力量を身につけていった彼女自身がその模範であった。このころ彼女は恋に身をゆだねる女性たち、情に左右されやすい女性たちを軽蔑さえしていたのであった。

ところが『論争』ではメルクリウスの口を借りて、男性的思考、男性社会の不備欠点が摘発され、それどころかこれまで誰もが信じて疑わなかった男たちの功績が、実は女性性、女性的思考に支えられたものであることが証明されてしまうのだ。愛の問題に限って見ても、本章の冒頭で述べたように、愛と肉欲を背反する関係と見なし、精神的な愛にのみ価値を与えるアムール側の論理は男性の、そしてフォリー側の論理は女性の属性と伝統的にきめつけられ、その評価は社会的優劣を根拠に固定されてきた。それを覆す作者の思考のプロセスに、献辞から『論争』にいたるラベの男性論、女性論の推移そして深化を読みとることができる。

男神のアムールと女神のフォリーの裁判は裁判長も双方の弁護人も男性という完全な男社会のなかで進展する。これは、父親や夫の庇護がなければ訴訟を起こすこともできなかった当時の女性の現実を反映させたものであり、男性が女性の代弁者であるような堅固なシステムに対するフェミニストの問題提起だと言えるだろう。父親不在の主人公や、終始一貫してフォリーに有利な筋運びは、作者の意図が男性や男性社会の攻撃にあるかのような印象を与える。しかし、フォリーに侮辱されたアムールはまず母親ウェヌスに「言いつけ」に行き、アポロンを代弁者にと指名するのはこの母親である。フォリーを弁護する男神メルクリウスは、時にフォリーになりきって直接話法で語るほどの存分の

働きをするし、実質的なフォリーの勝訴を宣言するのは神々の父ユピテルなのだ。こうした設定は、男と女という二分的思考や価値の固定に無理があることを示唆するものと考えられよう。さらにメルクリウスは、恋の情熱のために「理性から外れてしまった人」（テキスト p.87）の例として「オンファレの糸轡を繰り出すヘラクレス」（同書）を挙げてアポロンの論述に決定的な反証をつきつける。数多くの武勲をたてたこの英雄は、賢者と狂人など相反する性質を兼ね備えていたとされ、その意味でも示唆的だが、この引用は、リュディアの女王オンファレの奴隷となりやがて彼女への愛に溺れていくヘラクレスが、オンファレの命じるまま女装して女の仕事をするという伝説を踏まえたものだ。ここで作者は、「男のように」をスローガンに心身を切瑳琢磨しつづけた自身の男装歴をオーヴァーラップさせる。英雄ヘラクレスにもう一つの、女の顔があるように、作者自身にも男性性と女性性が等しく備わっている、人間はすべて本源的に両性を具有しているのだということが確認されたのである。アムールとフォリーの永遠の二人三脚を命じたユピテルの判決は、男女は補完し合うべきという、差異を根拠にしたメッセージではなく、人間の両性具有性と二つの性の等価値を認め、一個の人間においてもまた社会の中でも、男性原理と女性原理が対立したり排除しあうのではなく、相互作用を及ぼしつつ均衡を保つことこそ自然の摂理にかなうのだというラベの男性・女性論の結論ととらえるべきであろう。

彼女の女性論、というより人間論がその後のフランス社会に順調に根づいていかなかったことは、歴史をたどれば明らかである。このことについてK. ペリオは、ラ・フォンテーヌの寓話を取り上げて興味深い指摘をしている。寓話『愛の神と狂気の神』は『論争』から着想を得たとされる作品であるが、その結末は「Le résultat enfin de la Cour / Fut de condamner la Folie / A servir de guide à l'Amour」となっている。ユピテルの判決文中の「vivre amiablement ensemble, ... guidera... conduira」（texte p.93）が「condamner」に置き換えられてしまっていることがラベ以後のフェミニズムの運命を象徴しているという

のである。再び排除の論理で秩序が維持される時代が到来し、その中で女性たちは、十九世紀になってサンドが男装し、ノラが「人形の家」を出るまで、長い冬眠を強いられることになる。ここで、『論争』におけるフォリーの勝訴はとりあえずの中間判決であり、この物語のエンドマークが作者の結語であったことが思い起こされる。この終わらせ方は、ルイズ・ラベがこうした歴史の変転をすでに見通していたことを暗示するものではないか。権力の交代や価値の逆転を、少なくともその可能性を予測していたのではないかとと思われるのである。

## 5

これまで見てきたことに明らかなように、『論争』にはラベ自身が、愛や人間の性、その他あらゆる領域についての二元的思考から脱却する経緯が実証的に開示されている。アムールの原理を優位に捉え、それをモデルと定めて自己形成をはかっていた作者は、恋愛体験を契機に自身の内にフォリーの存在を認めて愕然とするのだが、二元的葛藤を経て、アムールとフォリーによって具現される二つの原理が二律背反することなく、むしろ分かちがたく共存することを確信するに至るのである。アムールもフォリーも、つまりアポロンもメルクリウスも、裁定者ユピテルもルイズ・ラベにほかならず、最後の調停判決は彼女が内包する二元性の統合を意味する。

作者の内面の葛藤は二元性についての固定観念によって引き起こされたものであるが、それはまた二元性そのものの根本的な再検討を促した。愛の二面性、男と女、賢者と愚者、真実と虚偽、善と悪、理性と狂気、可視、不可視などの真の意味を問うてみると、相反するものとして分離されてきた二つの原理の境界の曖昧さが見えてくるのであり、その等価値から可逆転換性、さらに類似性にまで敷衍することが可能になるのである。

フォリーを顕在化して市民権を与えた作者は、ユピテルに排除ではなく共生

を提唱させて物語を締めくくっている。ところで、この『論争』に託された作者のこうした思想は、現代社会において久しい前から俎上に乗せられているのであり、排除ではなく共生を、などという理念は我々の耳にはいささか陳腐に聞こえるほどである。はるか四世紀昔にすでにこの理念が打ち立てられており、そして今なお同じ議論が沸騰している、この事実がこの物語の後に置かれたルイズ・ラベの結語のなぞを解明してくれる。この結語は、対立しているかに見える二つの原理の可逆転換性を象徴すると同時に、この論争そのものが永遠に終わることはなく、主導権の交代は際限なくくり返されるであろうという、歴史の必然を見据えた予言でもあるのだ。『論争』に内在する論理はいっそう複雑に交錯することになる。二元的思考の否定、価値の転換、多様性の容認が反発や葛藤を消滅させる代わりに、その不確実で曖昧な状態によって人間や社会を混乱に陥れる危険性を孕んでいることを、そして調和や共生という理想の実現がいかに困難であるかを、ルイズ・ラベは予見していたと思われるのである。彼女の慧眼によれば、確立されつつあるかに見える現代社会のフォリーの論理も、再び暗い闇のなかに押し込められてしまうことになるのだろうか。

テキスト： *Louise Labé Œuvres Complètes*, édition critique et commentée par Enzo Giudici, Droz, 1981.

主要参考文献： Dorothy O'Connor, *Louise Labé sa vie et son Œuvre*, Les Presses Françaises, 1926.

Karine Berriot, *Louise Labé, La Belle Rebelle et le François nouveau*, Seuil, 1985.

Keith Cameron, *Louise Labé, Feminist and Poet of the Renaissance*, Berg, 1990.

岡本祐子『ルイズ・ラベ、〈狂気の神と愛の神の論争〉について』福岡女学院短期大紀要第28号第29号、1992、1993。

ミシェル・フーコー『狂気の歴史』田村 俣訳、新潮社1975。

(文学部非常勤講師)